エコビレッジの意義と日本での展望

－持続可能な社会構築に向けた草の根のコミュニティづくり－

糸長浩司
（NPO 法人パーマカルチャー・センター・ジャパン代表、日本大学生物資源科学部教授）

1.オルタナティブ・グローバリゼーションとしてのエコロジカルなコミュニティづくり

化石エネルギー依存型の近代社会経済システムは、地球レベル、地域レベルで、環境、水、エネルギー、食料、コミュニティ等の多様で複雑な問題を露出させ、それに対し持続可能な社会の構築が問われている今日、サステナブル・オルタナティブ・コミュニティ、エコビレッジをテーマに、GEN の協力を得て国際会議を東京で開催することは非常に意義があります。近代的西洋的なライフスタイルの変革が叫ばれ、それに代わる縮小経済社会の構築に向けたオルタナティブなライフスタイルの創造（デヴィッド・ホルムグレ『Permaculture/ Principles & Pathways Beyond Sustainability』）と、そのための空間、環境の創造をテーマとした草の根の人達による等身大の実践が緊急の課題となっています。

産業革命以降の資本主義的西欧的近代化は、画一的で規則的な機械的リズムでの行動を人間に強い、生活者の空間、時間が資本的に効率良く集約される仕組みとして、画一的で機能的で標準的な空間、人工空間、都市空間を大量に生産してきました（仏の哲学者アンリルフェーブル『空間の生産』）。更に今日では、世界的な資本市場形成の拡大によるグローバリゼーションの下、生命、人間生活、知的活動もその中に包含される状況に対し、個々の地域での特異性と<共>性を尊重し、新たなコミュニティを獲得するためのオルタナティブ・グローバリゼーションの運動も活発化しています（イタリアの活動家アントニオネグリ『帝国』、『マルチチュード』）。

急激なグローバリゼーション的な経済社会は、地球のエコシステムキャパシティを超えた状況に至り、地球一個分では納まらないエコロジカルフットプリントとして地球に負荷をもたらし、生物多様性、自然と人間の持続的共生関係にも多様な課題を提示してきており、地球上での持続可能な生命、人間居住を脅かしています。20 世紀型のライフスタイル、社会経済、環境・空間の変革が迫られ、それに代わるより持続性、エコロジー性、<共>性の人間居住デザイン、バイオリージョン（生態地域）への再定住（ゲーリースナイダー『A PLACE in SPACE』）が求められており、その一つの解答としてパーマカルチャーやエコビレッジがあると考えます。

仏の哲学者故ガタリの生態性、社会性、精神性（『三つのエコロジー』）の総合的なエコロジーの追求、米国の哲学心理学者ケンウイルバーの物性・感性・知性・精神性からなる統合的な世界観、スパイラルダイナミックス理論にみる人類の精神的進化の提示（『万物の理論』）等、西欧的智・精神性と東洋的禅的智・精神性の統合深化による新たな世界観の創造に向けた＜共＞的な活動も活発になっています。グローバル・エコビレッジ・ネットワーク（GEN）においても三つエコロジーを包含し、地域個性を生かした多様なエコビレッジの創造を目指したオルタナティブ・グローバリゼーションのネットワークの構築を目的として活動が世界的に展開されています。

日本には１３．５万の農村集落文化や、下町コミュニティ文化が脆弱化しつつも残っていますが、急激なグローバリゼーションがこれらを破壊し、標準化された社会、空間、時間を急ピッチで作ってきています。それに対してコーポラティブ、コレクティブハウス、エコロジカルな住宅地、グリーンツーリズムやエコツーリズムによる農村環境の再生のための交流や再定住の試みも起きてきています。日本的な歴史・文化・空間・社会資産の継承・蘇生・再生・新生、三つのエコロジー、再定住、オルタナティブ・グローバリゼーションの理念を持ち、日本的特異性を生かし、世界的にも発信できる日本型エコビレッジの

創造を進めていくことが必要です。この東京会議がそのためのより良い情報、人、智、情、精神の交流の場と時間となり、新たなエコビレッジ・ネットワークの構築の出発点となることを期待したいと思います。

２．パーマカルチャーとエコロジカルな地域づくりの実践

１）パーマカルチャーの日本での拠点とネットワークづくり

農を生かした持続可能な暮らしのデザイン体系であるパーマカルチャーの理念、方法を日本にどう定着、発展させるかを、現事務局長の設楽清和らと共に考え、1993 年頃から研究・交流活動を始め、1996 年に現在の神奈川県藤野町篠原に活動拠点を設置し 2004 年に NPO 法人化した。日本の自然性、特異性、歴史・文化性を尊重し、より持続可能な暮らしを個で、共で築くための理念、手法、実践を世界のパーマカルチャー運動と連携しながら進めてきた。廃屋と放棄農地を改良し、パーマカルチャーの理論、デザイン手法、自然観察、農業、大工技術の修得等を含む多種多様で総合化した、実践的なパーマカルチャー塾の開催し、更に、パーマカルチャー、エコビレッジ、地域通貨、ストローベイル、自然建築等に関する公開イベント､海外でのパーマカルチャーサイトやエコビレッジ視察を行い、全国的なパーマカルチャー・ネットワークの発展に寄与してきた。東北、長野、九州の各地で、パーマカルチャーの仲間達が活動拠点を開設し、地域の個性を生かし、エコロジカルな生活及び地域づくりを考え、実践する役割を果たしている。

1995 年の第一回エコビレッジ世界大会に設楽と参加して以来、英国、北欧、豪州でのエコビレッジを訪れ､『BIO-City』等の書籍や講演会等で紹介し、日本でのエコロジカルな地域再生、共的集住再生、創出のための理論、デザイン論を展開している。

２）大学キャンバスでの学生ともにパーマカルチャーの実践

神奈川県藤沢市にある大学キャンパス内に、地中熱利用冷暖房、屋上・壁面緑化の環境共生センターの設計、建設に寄与し、その性能評価研究を進め、また、植物による汚水浄化システム開発、ストローベイル及びラムドアースの自然建築の学生との共同自力建設、パーマカルチャーガーデンづくり等を進め、大学発のエコセンターづくりを進めてきた。

３）住民主体のエコロジカルな集落再生支援

日本の農山漁村集落の環境共生的暮らし文化の価値を継承し、かつ持続可能な集落として再生するための支援研究を実践的に進め、森林バイオマスエネルギーの地産地消戦略によるエコビレッジ、集落自身での自律・自立的でスローライフなむらづくりを支援している。PCCJ のある地区では、集落 NPO による廃校活用の地域交流、都市農村交流での自然、田舎暮らしの学びと交流のエコロジカル活動､エコビレッジ的な集落活動を支援している。

３．日本型里山エコビレッジの展望

２１世紀の最初の四半世紀は環境共生的で持続的な暮らしのあり方の構想と実験の四半世紀となろう。そのキーワードは、環境、食糧、エネルギー、社会、経済、精神性にある。

日本的な地域資源の財産として､近年も多様な分野から里山･里地が注目されている。ここでは、先に提言したエコビレッジの日本型モデルとして「里山エコビレッジ」を提言する。

人間にとっての基本的人権ともいえる、安全で新鮮や食の確保、人間交流、仕事の場、自然とのふれ合いが身近な場で確保できることが最も豊かな暮らしとなる。そのような条件が容易に、身近な場で確保しやすい状況にある地方の都市周辺の環境は今後ともより魅力的となる。０成長、環境時代、都市の時代の終焉の中で、地方都市周辺の田園居住やその周囲の自然環境の魅力は増してきている。都市的な利便性は、近くの市街地で満たすとして、それ以外の食の確保やアメニティ性の確保や癒しの場、自然を介した人間形成の場として、遠方ではなく、居住地の近場にそれらの環境が用意されていることがより魅力的となる。

１）．里山とは何か

①縄文の時代から，自然を人為的に攪乱し，持続的に活用してきた半自然
②人為的に攪乱し，持続的に活用してきた半自然
③縄文の森の農業と弥生の湿地農業の融合領域
④縄文文化・精神の復活，
⑤自然との向き合い自己啓発の環境
⑥土・水・動植物・風・自然環境・食糧・エネルギー・自己創造・コモンズの場

２）．日本の農村環境のもつエコロジカルな視点からの再評価

①集落環境のもつ里山～居住地～水田に至る段階構成（日本建築学会『図説集落』で展開された論的）地域での自給・循環システムとしての再評価
②コミュニティ形成と維持、持続性としての社会・経済・精神面での共同性
③二次自然環境としての農村空間の価値，里山の持つ原生種の保全的な再評価
④地域自立・循環系としての農村環境の総合性
⑤農村での生産と生活におけるローカルテクノロジーの再評価と活用
⑥環境共生型の定住拠点としての農村の価値評価と再定住化，
（「多自然型居住」、エコロジカルハビテーション）
⑦都市にとっての農村環境の価値づけ、　都市農村交流、グリーンツーリズム的評価

３）．農村地域のエコビレッジ化の展望

①既存の集落（全国１３．５万集落）の再構築　→→　　再構築型エコビレッジ
②既存の集落とは別に新しきエコビレッジを作り上げる　→→　新生エコビレッジ

４）．里山エコビレッジ構想①里山の特徴を活かした自給自足のエコビレッジ
②新しい自然共生型暮らしの体感の場
③エコロジカルエデュケーションの場づくり
④新しいコモンズの形成
⑤奥山－里山－里の循環系の新構築、
環境・食糧・エネルギー・コミュニティ

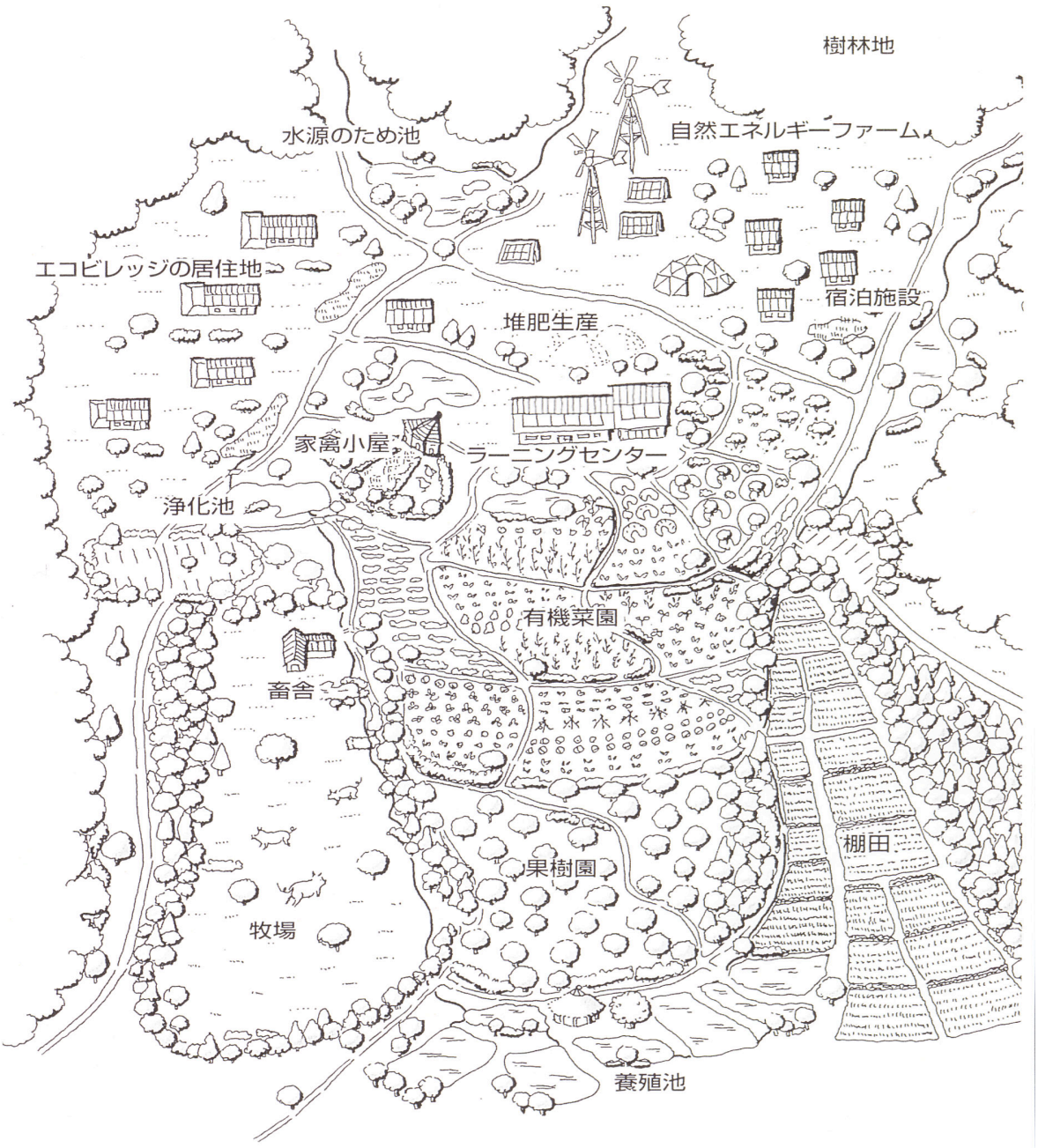
５）．里山エコビレッジの住民はどんな人達か

①　その農村地域の住民。
②　環境共生型で農的な暮らし志向派市民
③　退職したエコライフ志向派市民
⑤　農林業，環境事業、環境教育事業の担い手（協同組合形式での事業）
⑤　週末や季節的に訪れる半定住型市民エコ学習教室に参加する人。

６）．エコビレッジの空間構成

①　住宅ゾーン：戸建て、テラスハウス、共同住宅等。
古民家のエコ的改造，新しいエコハウス等，
②移動ゾーン:自転車道、散策路等。
③コミュニティゾーン:コモンハウス、コミュニティガーデン、ため池（水源)、植物による汚水浄化システムとしての浄化池
④交流・学習ゾーン：オーガニックショップ，レストラン，講義・実習棟，
交流センター，宿泊エコキャビン等。
⑤エコワーキングゾーン：土木建設，緑化，鍛冶工房。
エコ工房空間・エコ産業の起業化センター
⑥農業ゾーン　：エコビレッジ内の主要な食糧を生産する。菜園，家禽，果樹園，水田、放牧地，等がパーマカルチャーデザインで構成される。
⑦里山ゾーン　：エコビレッジ内での必要な木材や林産物資源、燃料となるチップ等の生産。ため池。憩いと癒しの空間。
⑧自然再生・創造ゾーン　：エコビレッジの敷地で荒廃した環境の自然再生，生態系再

生も重要なテーマ。里山ゾーンが中心で，居住地ゾーン、農業ゾーンの中にくさび型で入り込む。野生動植物，小川，河川等のふれあいの場。ビオトープネットワーク



学びの里山エコビレッジのイメージ図